

平成 31 年 2 月 20 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880179

氏名 坪田 珠里

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ホーチミン市 (国名 ベトナム)
2. 研究課題名 (和文) : ベトナムにおける日本語長期使用者の動機変容と自己変化に関するナラティブ分析
3. 派遣期間：平成 30 年 8 月 23 日 ~ 平成 31 年 1 月 24 日 (154 日間)
4. 受入機関名・部局名：ホーチミン市国家大学 人文社会科学大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本件現地調査では、(1)ベトナムで JFL としての日本語を使用するキャリアを形成してきた日本語話者を研究対象として、彼らのこれまでの日本語の長期使用における自己の発達的変容を分析すること、(2)日本語話者の日本語を通じた実社会との繋がり (ネットワーク・交流) と実社会への具体的な行動を解明すること、を目的とした調査を行った。具体的には、大学・学校卒業後の日本語話者の人生における日本語との関わりについて、ベトナム人日本語話者 (日本語学習の開始がドイモイ (1986 年の社会経済改革) 前か後かで区切り、大きく 2 つのコーホートに分けた) に対し、日本語を使用するキャリアの形成の中で、特に日本語使用を通じた (a) 異文化接触による思考と行動の変容、(b) 自己役割の認識の変容、(c) 自己効能感の変容、などについて焦点をあてて語りを得た。そして、彼ら日本語話者どうしの個人間のつながりやコミュニティ活動など、社会で行う具体的な行動の事例につき詳細なデータ収集を行った。

現地調査において得られた数十人に対するインタビューデータについては、現在、世代ごとに文字起こしを進めつつ、テキスト化された文章にコーディングを行うなどの処理を開始している。仮分析を行ったものに関しては、2 つの成果発表にまとめた (6. ご参照)。一方で、現地調査により得られた新たな知見 (1970-80 年代の日本語教育における日本側の役割) については、日本での更なる調査が必要であるため、それについては 2019 年度に改めて調査を行う予定である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

2018 年末までの研究の経過発表として、現在のところ 2 つの成果発表を予定している。両方とも、インタビューデータを (仮) 分析したものである。1 つは『日本語教育学会』春季大会 (5 月予定) での発表 (発表申し込み中) であり、もう 1 つは、『国際言語文化学会日本学研究』へ投稿中の研究ノートであり、こちらは修正後の採録が決定している (論文タイトル: 「ベトナム人帰国技能実習生の職業生活に関わる一考察 - 「転ばぬ先の杖」としての日本語の役割」)。いずれも、他研究者の方々からのコメントをいただくことで、データの分析をさらに精査していきたいと考えている。

2019 年 4 月からは、日本学術振興会の特別研究員として本件研究を引き続き行う予定である。本研究では、海外日本語教育を、「政策主体である国家」、「学習者個人」、そして「外国語が使用される社会」という 3 つのレベルに分けて研究を行ってきたが、2019 年度は調査で得られた個人と社会に関するデータを分析・考察することに主眼を当てる。また、足りない資料・データについては鋭意収集に努める。2019 年度中は、博士論文の執筆と並行して、論文の投稿や学会発表等での成果発表を行う。そして、2020 年度中には、英語やベトナム語での研究成果発表を行う予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究を行うにあたっては、ベトナムである程度の長い期間をとって調査を行うということが不可欠であった。なぜなら、本研究の中心となるインタビュー調査はその協力者を募るのにも人脈づくりから始めなければならないし、資料の探索・収集にも時間がかかるからである。そのため、本プログラムで海外現地調査に行かせていただいたことは、研究に必要な十分な期間を取ることができたという面でも、また、金銭的な不安を軽減するという面においても、研究遂行にはなくてはならないことであった。本プログラムに採用されたことで得られたことは、特に以下の 2 つの点に集約できる。

まず 1 つ目は、貴重なデータ収集を行うことができたことである。インタビューのためには、まず協力者を探すことから始まり、アポイントの取り付け、実際のインタビューの実施、と段階を踏んで行う必要があるが、相手のある話なので同時並行でいくつもこなすのには限界がある。そのため、余裕をもったスケジュールを立てて進めることが必要であるが、5 か月という現地調査の期間を取ることができたことで、(それでも十分であったとは言いがたいが) 貴重な生データを多く得ることができた。また、資料に関しても、現地で腰を据えて調査を行ったからこそ存在を知ることができたものや、人間関係を作れたからこそ提供してもらえた紙ベースの資料もたくさんあったように思われる。2 つ目は、今後の調査につながる人脈づくりができた点である。現在取り組んでいる課題は、人間を対象としているものであるため、今後も数年、数十年単位で継続して研究を行う必要があるものである。そのための関係づくりや人脈づくりができ、今後の研究の基礎とすることができたのは、本プログラムで長期間調査に赴くことができたからこそであり、本プログラムに採用していただいたことにつき、改めて感謝の意を申し上げる。